

命終心事

於「命終心」總有「三重」。初「僊相現行位」。明了意識。三性

不定。若論「方便」又通「五識」。次「細相現行位」。不明了意識。微細現

起與「我愛」相應。其性定染汚也。有覆三「悶絕位」。悶絕者非

狂亂。唯有「七八二識」。已前六識悉皆滅盡。攝「之无心悶

絕」。七八雖「有僊心滅故名爲「无心」。一切凡夫或設詣

內院「若生「淨土」後二位其相必然也。今所「欣正念者。

第一「僊想現行位」。三性不定中。離「不善无記」欲「住」明

了善心」。凡「聖教名」命終心「亦有」二位」。所謂自「本有」向

中有「自」中有「向」生有」。各末後心。其中本有命終心多

分起「自體愛」。一期既極願「戀身命」故。中有命終心多

分起「境界愛」。見「當生父母等」。於「男女身」生「愛恚」。故起

「境界愛」。又生「色界」於「宮殿等」起「愛結」生。淨土蓮臺准

彼可「知」。彌勒寶宮无「姪事」故。生「蓮華」故。同「淨土」也。自

餘欲天皆雖「化生」。依「父母」生。尚可「起」男女之「愛」。是以

悶絕之位者。染汚末那微細「起」。不「潤生緣」故置而

不「論」。細想現行位者。有覆无記意識雖「正潤生」。決定

起「之」。變化淨土知足內院等。皆依「彼結生故不能遮

止」。今只於「本有僊想現行位」。善業成就故。「三寶加被

命終心の事

命終心に於いて総じて三重有り。初めに僊相現行位と明了意識と三性不定なり。「若

し方便を論ぜば又五識に通ず。」次に細相現行位と不明了意識なり。微細現起して

我愛と相応す。其の性定んで染汚也。「有覆无記なり。」三つに悶絶位なり。「悶絶

は狂乱に非ず。」唯だ七八の二識有り。已前の六識は悉く皆滅尽す。之の无心は悶

絶を撰す。七八有りと雖ども僊心滅するが故に名づけて无心と為すなり。一切の

凡夫或は設ひ内院に詣で若し淨土に生じて後の二位は其の相必然也。今、欣ぶ所

の正念は、第一の僊想現行位なり。三性不定の中、不善の无記を離れ明了の善心

に住せんと欲す。凡そ聖教に命終心と名づくに亦た二位有り。いわゆる本有自り

中有に向かう。中有自り生有に向かう。各の末後の心なり。其中、本有の命終

心は多く分れて自体愛を起す。一期を既に極めて身命を顧恋するが故に、中有の

命終心は多く分れて境界愛を起す。当生の父母等を見て、男女の身に於いて愛恚

を生ずるが故に境界愛を起す。又、色界に生じて宮殿等に於て愛を起し生を結ぶ。

淨土の蓮台彼に准じて知るべし。彌勒の宝宮に姪事無き故に、蓮華を生ずるが故

に、淨土に同じ也。自余の欲天は皆化生すと雖も、父母依り生ず。尚、男女の愛

を起すべし。是を以て悶絶の位は、染汚末那の微細の起ると雖も、潤にじしょう生の縁な

らざるが故に置いて論ぜず。細想現行位は、有覆无記の意識は正しく潤生すと雖

も、決定して之を起す。变化淨土知足内院等は、皆な彼に依て結生するが故に遮

止すること能ず。今は只だ本有の僊想現行位に於て、善業成就の故に、三宝加被

故。安住正念如願取終。於彼僦想位亦有三重。六識皆起時。其心殊明了。眼見佛像。耳聞法音。自他和合。互有覺悟。五識漸減意識獨起時。設念佛聞法。餘人難知。殆如无心。凡夫善知識。隨分雖有其益。狂亂之時不敢隨其命。無心之位總無聞其聲。至大聖化身者。神通方便不可思議也。肉眼設掩。聾驗雖隔。觀音形聲曆曆當心。魔界寧狂。業障雖覆。權化教誠念念開悟。彼般若安置之處。龍天影向之時。或現光明。或薰妙香。冥灑精氣其體充盛增長。天神威力猶如此。大聖降臨其德幾計。彼苾芻形者。若為迦葉阿難等證果賢聖歟。或又為玄奘慈恩等有緣祖師歟。威德尊貴自催渴仰。至聖人教誠微妙。速開無生悟矣。

以上海住山御艸

本云以上以覺靜房寫之自見而如形一交了
自用雖無其甲斐且為尊神法樂一分且為未
來法器錄之

天正九年辛巳三月日

權大僧都英俊
六十
四歳

の故に、正念に安住すれば願の如く終を取る。彼の僦想位に於て亦た三重有り。六識皆起こる時、其の心殊に明了なり。眼には仏像を見、耳には法音を聞く。自他和合して互に覚悟有り。五識の漸く減して意識の独り起る時、設ひ仏を念じ法を聞くと、余人は知り難し。殆ど无心の如し。凡夫の善知識は、随分と其の益有りとも、狂亂の時は敢て其の命に随わず。無心の位は総て其の声を聞くこと無し。大聖の化身に至るは、神通方便の不可思議也。肉眼設ひ掩ひ、聾驗隔つとも、観音の形声は曆曆として心に当たる。魔界の寧狂は、業障覆うとも、權化の教誠は念念に開悟す。彼の般若安置の処は、龍天影向の時、或は光明を現じ、或は妙香を薰ず。冥は精気を灑して其の体は充盛し增長す。天神の威力は猶お以て此の如し。大聖の降臨は其の德幾計ぞ。彼の苾芻の形は、若しは迦葉や阿難等の証果せる賢聖の為なる歟。或は又、玄奘や慈恩等の有縁の祖師の為なる歟。威德尊貴は自ずから渴仰を催す。聖人の教誠は微妙なり。速かに無生の悟りを開かん矣。

以上は海住山の御艸なり

本に云く以上は以て覺靜房之を寫し、自見にて形の如く一交を了ぬ
自用は其の甲斐無しと雖も、且つは尊神法樂の一分の為、且つは未
來の法器の為に之を録す

天正九年辛巳三月日

權大僧都英俊
六十
四歳